

## A propos de nos projets...

最近の事業から

### 日本ハンチントン病ネットワーク主催 「舞踏ワークショップ」に参加して

当財団助成事業の一つである日本ハンチントン病ネットワーク主催による舞踏ワークショップが、東京と大阪の2箇所、計3回開かれた。

完治しない難病であるハンチントン病(HD)の発病率は、日本人では100万人に5、6人と少ないが、外国では10万人に4人から10人という数で存在している。脳内の細胞が失われることで疾病が引き起こされ、通常中年以降に発病。症状が進行すると、思考能力の低下を及ぼすと共に、感情や身体のコントロールが効かなくなり、不随意的な動きを伴い、やがて死に至る。またこの病気の特徴に、遺伝子によって次世代に伝わる優性遺伝がある。1993年には、HDを引き起こす遺伝子が否かを特定することができるようになったが、治療法はみつかっておらず、未だ対症療法にとどまっている。



フランスでHD患者を対象に実験

的に行なわれていたプロジェクトが、コンテンポラリーダンスのダンサーや振り付け師と専門医チームが組んで推進するダンス・アトリエだ。

これは医療行為ではなく、ダンスによって苦しみの中にある患者にいくらかでも楽しみを持ってもらえればというものである。今回、フランスでワークショップを開いているダンサーのジュリー・サルグさんとフィリップ・シエールさんの二人を招き、日本で初のワークショップの試みとなった。

東京で行なわれた最終回の参加人数は16名。多くは家族にHD患者を持つ人々だが、屋久島在住の舞踏家、藤枝虫丸さんを招き、即興でフィリップさんと舞踏とダンスの「コラボレーション」を披露するなどして、充実した3時間となった。

父親が現在闘病中であるフィリップさん自身の自己紹介から始まったワークショップは、参加者が体を通して互いを確認するという内容である。たとえばペアで背中合わせになって横たわり、相手の呼吸を背中で感じ合ったり、声を出す。またよばばらいのポーズと称するものは、全員が手をつないで輪になった中に1人が入り、その1人はよばばらいのように脱力して体を人の輪に預ける。すると、波打つように全体の輪が動き出すというもの。時間がたつうちに、互いの信頼関係が生まれ、相手なり



グルーブに体を預ける心地よさが生まれてくる。それはまるで、体で会話をしているようだ。最後の全員が車座になって感想を述べ合うまでがワークショップの重要な流れである。「家族やいろいろな人とこうして一緒に体を動かすことができるという場と関係、そしてその体と心の解放感を知ることが大切です」とフィリップさん。発病する前のように、再び触れ合いを持つことができるようになったカッパルの実例を話した。また今回のワークショップを導いた中心的存在の信州大学医学部社会科学研究室の武藤香さんは、大阪で参加したHDの患者さんの声を代弁して「みんなの関係が一つになる空間を持つことがわかったただけでも発見だった」と話した。発病後は引きこもりがちな患者を社会や家族がいかに支えるかの1つの手立てをワークショップは教えている。このような試みがさらに広がりを持って展開されることを期待したい。

## A la carte

ア・ラ・カルト

### 設立15周年記念コンサートを開催します

2005年6月1日、6年間におよぶシャトレ劇場での研修事業の成果を披露するとともに、笹川日仏財団の設立15周年を祝うために同劇場において記念コンサートを企画しています。第一部では、研修生のうち最も優秀だった声楽家とピアノリストによる、オペラ作品のデュオやトリオを上演。そしてメインアーティストとして、「打楽器の巨匠」ツトム・ヤマシタ氏を招聘し、同氏が1980年代後半より取り組んできた石の楽器「サヌカイト」音楽を演奏。フランスの方々に堪能していただきたいと思っています。

ジャンルを超えた音楽活動を活発に行ってきた。また今シーズンシャトレ劇場にもプログラムされている作曲家ヘンツェや武満徹などとともに、数多くの打楽器作品を生み出してきました。1986年からは石の楽器「サヌカイト」音楽の完成を目指し、太鼓の石が持つ安らぎと愛に満ちた、より深い次元の音楽を創造し続けています。



## Petite note

編集後記

フランスにきたものの、まわりとコミュニケーションがうまくとれず、精神的にまいってしまうのをバリ・シンドロームというのだそうです。毎年百名以上もの日本人がこの病気にかかっているとか。日本人にしか表れない症状かも?

(1)

笹川日仏財団ニュースレター

## La Lettre

2004年12月発行 Vol. 8 No. 3  
 発行人: 富永 重厚  
 編集人: 関 晃典  
 発行: 笹川日仏財団  
 〒107-0052 東京都港区赤坂1-2-2  
 TEL: 03 (6229) 5448  
 FAX: 03 (6229) 5449  
 E-mail: t-ito@spf.or.jp  
 http://www.spf.org/ffjs/